

から、毎日小さなことを積み重ねております。どうぞ後輩の皆さん、ぜひ教員になって一緒に勉強しましょう。お待ちしております。』

昭和40年度卒 市川三重子先生

『一昨年池尻小学校に勤務していたときに教育実習生と学ぶ機会があり、懐かしく思い、また、お手伝いさせていただきました。池尻小学校では同窓生の千原和枝先生が読み聞かせの指導で力を発揮されています。』

平成10年度卒 加藤由美子先生

『皆さんと出会うためにまっている児童達が必ずいます。最後まであきらめずがんばってくださいね!「先生大好き」と言ってもらえた時、本当にこの仕事を選んでよかったと感じます。』

昭和48年卒 富田貴志子先生 (中央区立宇佐美学園副園長)

『昨年から宇佐美で勤務するようになりました。子どもたちが24時間の寮生活ですので、私たち教師も同じ敷地内に在る教員宿舎での生活です。(中略) 今回のシンポジウムの中で、私の経験はたぶんあまり例のないものであり、またこれから教職を目指しておられる方々に健康学園の存在を正しく理解していただける絶好の機会だったなあと、ますます残念な気持ちになります。』

昭和43年度卒 大倉喜代美先生 (品川区立大原小学校長)

『異動のため手紙が届いたのが大学祭の後でした。またこのような機会がありましたら是非参加したいです。』

昭和51年度卒 三浦佳津美先生

『学習する喜び、できる喜び、世の中のあることこんなことを伝えたい、という思いで取り組んでいます。教職を目指す皆さんには、たくさんの経験を積んだり今のうちに本を読むことをお勧めします。』

昭和48年度卒 角田由美子先生 (葛飾区立宝木塚小学校)

『午後は久々に足を延ばしてみようかと思っております。少しでも、ご恩返しができることがありましたら、協力させていただければ幸いです。』

平成11年度卒 田中千史先生 (台東区立谷中小学校)

『学生時代に小学生とかかわるアルバイト等をしてください。また、まったく違う世界を見るという意味でもさまざまな経験をしてください。』

(小学校シンポジウム記録作成: 阿部聖華, 渡辺真未, 有村久春, 松本淳)

幼稚園シンポジウム

テーマ:「幼稚園教諭の魅力語る」

日時 平成15年11月9日(日) 10:00~12:00

場所 大学3号館 3S02教室

シンポジスト

中嶋泉先生 目黒区立みどりがおか幼稚園教諭 (昭和54年度卒業)

千葉江美先生 千代田区立富士見幼稚園教諭 (平成2年度卒業, 平成3年度専攻科修了)

野村容子先生 中央区立泰明幼稚園教諭 (平成3年度卒業)

馬場広子先生 江戸川区立小松川幼稚園教諭 (平成6年度卒業, 平成7年度専攻科修了)

司会 阿部聖華 (人間教育学専攻2年), 渡辺真未 (人間教育学専攻2年)

【幼稚園教諭の魅力とは】

中嶋先生が思う幼稚園教諭の魅力は、何よりも子どもと一緒に生活できること、また、たくさんのお母さん達や子どもと接していく中で、自分が少しずつ、成長できたことがこの仕事の魅力だと言われる。

千葉先生が幼稚園の先生になろうと思われたのは、ご自身が幼稚園の年長の時に出会った担任の先生の影響だった。千葉先生は、この担任の先生が大好きで、将来この先生と一緒に仕事をするんだと思いつけてきた。そして初等教育学科に入ってきた。大学で勉強して、子どもに関わる仕事は、きわめて責任が重くて大変だと思うと同時に、やり甲斐がある仕事だと感じた。就職したら、最初は分からないことばかりで、大変だった。でも子どもに関わりながら自分自身が成長できる。元気をもらえる時がたくさんあると感じている。ちょっと体調の悪い日でも、幼稚園に着いて子どもたちの顔を見ると、笑顔が出てくる。このことこそ、この職業の魅力だと感じている。また、先輩教諭を見てこんな先生になりたいなという想いが持てる、そんな魅力もあると語ってくれた。

野村先生も小さい頃から幼稚園の先生に憧れていた。小学校の卒業アルバムに幼稚園の先生になりたいと書いた記憶もある。幼稚園の温かい雰囲気や小学生なりに感じて憧れていたのだ。頑張っている子どもの姿に触れられることや、日々子どもたちが成長していく姿を見られるところにこの仕事の大きな魅力を感じている。

【子どもと接する時に心がけている事】

野村先生は、毎日夢中で子どもたちとかかわっている。ふと立ち止まって考えてみて、子どもの言葉や動きを、肯定的に見つめて、認めて、受け止めていかなければと思うこともある。子どもの言動の表だけを見るのではなく、裏側にあるものを見てから、次の関わりを考えるように気を付けている。

中嶋先生が心がけているのは、毎日子どもと接する時には心身ともに元気であるということ。また、保育は人間と人間との付き合いなので、常に謙虚でいたいと思っている。特に、心がけているのは、子どもとの約束は絶対に守るということ。どうしても守れない時は真剣に謝る。保育は、人間対人間だから、誠意を持ってその子に接するように心がけている。

千葉先生も、元気で健康であることを心がけていることとしてあげられた。また、朝、笑顔で、子どもたちを迎え入れること。子どもは、敏感に先生の気（元気、明るさ等）を感じてしまう。先生がちょっと落ち込んでいたりすると、子どもも乗ってこない。先生自身がウキウキして楽しい思いで子ども達に接すると、子ども達もウキウキして、今日の保育はピタリいったと思えるのである。

質疑応答から

【子どもとのかかわりに関する質問①】

（質問）保育者の方がその日やりたい主な活動があると思うのですが、それに乗ってこない子（例えば、外で遊ぼうと言っているのに、中で絵本を読みたいと言う子）に対してはどう対応していますか。

この質問には千葉先生がお答えくださった。対応は、その時の状況やその子どもによって異なるという。体を動かす事が苦手で、「僕はお部屋にいるよ」というような子だったら、「今日はこんな面白い事をするからね。行ってみようよ。」と声をかける時もある。でも、その日朝から気持ちが沈んでいるようで、「今はそっとしておいて欲しいのかなあ」と思う時には、他の先生にお願いして、少しその子に寄り添って見てもらうこともある。千葉先生のクラスは2人で担任を持っているので、一人の先生が外の子どもを元気に遊ばせながら、もう一人の先生は中のその子に寄り添って少し気持ちを聞くという連携が取れる。そして、やはり全員に経験させたいという内容の活動であれば、その先生がフォローしながらお庭の方に行き、一緒に遊んだり活動を見たりする方法も考えられるという。

【子どもとのかかわり（発達段階）に関する質問②】

（質問）教育実習をやっている時に、私がやろうかなと思うことに、先生から「この子はまだこうだから、やっちゃいけない」と言われ、やらないでおこうと思うと「あっ、手伝ってあげて」と言われました。個々の子どもへのかかわり方において、どういう点に気を付けたら良いか、アドバイスをお願いします。

この質問にも千葉先生からお答えいただいた。制作などは多少子どもによって技能的な個人差はあるけれども、3歳だったらここまで、4歳だったらここまで、5歳だったらこの程度という発達段階に沿った指導計画があって、制作の活動をする時に、この時期だったらこの活動を入れたいということはある。しかし、その中でこの子はまだこれは難しいから手伝ってあげようとか、この子はこれを自分でやらせようという見極めは、なかなか実習の中では難しいと千葉先生は言われる。4月から子どもに関わって、子ども達を見てきている教師だから、この子には手伝う、この子にはやらせる、と

いう見極めが出来るのである。

3週間という短い実習の期間に、学級の一人ひとりを理解して一人ひとりに対応して関わるのはなかなか難しいが、一人ひとりへの関わり方が違うこと、この子は今こういう時期なんだということを実習の中で学べたのは一つの成果ではないかと千葉先生は言われる。

その実習の経験を生かして、実際教師になった時に、一人ひとりの子どもに関わりながら、今この子がどういう発達をしているんだろう、この子にはどういう指導・援助が必要なんだろうと考えながら関わっていくとよいのではないかとお話しいただいた。

【入園当初の子ども達について】

(質問) 二年保育をしている野村先生は4歳児の担任ですが、入園当初の子ども達の様子について少しお話し頂けますか。

野村先生は、最初子どもたちは4月に入園してくるとお母さんと離れられなくて、泣いて大変なのかなと思っていた。しかし、意外とすんなりと離れられたことが今までは多かったという。きっと、お稽古事や児童館へ行くという経験も多かったのかもしれない。子どもたちは、幼稚園に来て遊ぶ事が楽しみだったり、魅力的なものがいっぱいあったりするの、カバンを背負ったまま、帽子を被ったまますぐに遊び始めたこともある。5月にお弁当が始まると、皆で食べるのだが、自分が食べている余裕なんか無いと野村先生は言われる。子どもがどこかに行ってしまうように両手と足も使って動かないように押さえていた経験も話してくれた。

(質問) 他に何か、入園当初のエピソードはありますか。

幼稚園教諭3年目の馬場先生は、一年目二年目は年長を続けて持って、今年初めて年少4歳児を持った。だから入園当初というのを平成15年4月に始めて経験した。野村先生が言われるように泣く子はわりと少ないという。すんなりと遊ぶ子が多い。初めは4歳児がどれくらいの事が出来て、どれくらいの事が出来ないのかわからなくて、子ども達の姿を見ながら模索しながらやってきたという。一番困ったのは、お話などをしたくて、子どもを集めようと思っても集まらないことだという。「集まって」という言葉が通じないし、「集まる」という行為自体が初めての体験なのである。従って、先生のところに集まると、こういう楽しいことがあるというのを分かってもらいたいと思い、色々工夫してきた。人形を持ってきたり、視覚に訴えるものをたくさん用意した。先生のところに集まると楽しいということが分かってくるとそのうち、「じゃあ集まろう」ということになるのである。

千葉先生は、渋谷区と千代田区の公立保育園を経験されている。渋谷区は二年保育だが、千代田区は三年保育で、3歳児が入園してくる。3歳児はこの間までオムツをしていた、入園後も取れないという子もいて、4歳から比べれば本当に赤ちゃんだ。しかし3歳児の方が4歳児に比べるとケロっとして、保護者の方が「もう行っちゃうの」と涙を流している場面もあるのだという。3歳児の方が訳がわからない分、何か楽しそうなものがあればそこで過ごしてみようという思い切りがあるのだ。先ほど馬場先生のお話の中に「集まる」ということを経験していないという話があったが、3歳児はもちろん最初の頃は集まることはできない。でも、先生が呼んで、他の先生も声をかけることで、なんとなく集まっているのが3歳児なのだ。でも中には、入園してきた時点でキチンと挨拶ができたり、「先生、これ何ですか」と丁寧語が使える子もいて、入園してくる子どもの姿が変わってきていると千葉先生は言われる。

【家庭との連携について】

(質問) 自分が先生になった時、家庭とどう連携を取るかで悩むこともあるかと思うのですが、家庭との連携について何かエピソード等ありましたらお願い致します。

中嶋先生は、保護者との連携は仕事をしている上での一番の悩みであると言われる。お母さん達には何十年という人間としての歴史があり、確固たる自分を持っている。そのことが時に理解し合うことを難しくしてしまうこともあるのだ。中嶋先生は、時々朝「うちの子は今日37度5分熱があるのですが、幼稚園にどうしても行きたいというので行かせます」と電話がかかってくるのだと話して下さった。熱が37度5分あったら幼稚園生活はできないし、もっと熱があがったら大変なことになる。でも、「そんな状態だったら休ませるのが常識でしょ」などと言ってしまうと、「まあ、なんてひどいんでしょ。うちの子はこんなに行きたがっているのに先生が駄目って言うんなら休ませます!」と不満を爆発させてしまうお母さんもいるのだ。そこで、「お母さんはどういう思いでこの電話をかけてきたのだろうか」とお母さん

の気持ちの背景に思いを寄せて、また、お母さんの持っている価値観も理解して対応していく必要があるのだ。

野村先生は、保護者の方には誠意を持って対応するが、困った時には先輩の力を借りるのだと教えてくれた。それは、同じことを言うのでも若い野村先生が言うよりも、もっと年上のベテランの教頭先生や園長先生が言った方が重みがあると考えているからだ。だから野村先生は、何か保護者の方との意思疎通で難しいことがあった時には、すぐに上の先生方に話をするように心がけている。そうすることで、「こうしたら良い」というアドバイスももらえるし、保護者との間に入ってもらうこともできる。一人で抱え込まないようにした方が絶対に良いと教えてくれた。貴重なアドバイスだ。

【家庭環境に保護者がどこまで関われるか】

(質問) 家庭環境によって、睡眠のリズムがおかしくなっていたり、朝ごはんを食べずに園にきている子もいると思います。そういう子ども達への対応、また家庭環境に保育者がどこまで関われるのかお聞きしたいと思います。

中嶋先生は、子どもたちが夜遅くまで起きていて睡眠が十分に取れていないことを最近特に強く感じていると言われる。また、朝ごはんを食べていない子が多いのではないかと問う。「食べてきた?」と聞くと、「ミルク飲んできた」とか、「お菓子を少し食べてきた」という。夜遅くまで起きていて、朝ギリギリまで寝ていて、親に無理やり起こされて引きずられるように幼稚園に来ているのだ。そういう子はしばらくボーっとして遊べない。睡眠が十分に取れていないと気力も湧いてこない。



そういうお母さんに対して、すぐに「私は睡眠をたっぷり取らせた方が良くと思います」などとは言わない。ある程度長いスパンで見て、その子がどういう状態で困っているかを具体的に、その子の姿を通してお話することが大事なのだ。

生活習慣の自立は両極になっていると中嶋先生は言われる。既に身に付いている子もいれば、うんちがオムツでしか出来ない子もいる。うんちを拭けない子はとても多いという。これも「出来ないんですよ」と伝えるのではなく、「今こういう風に頑張っているんですね」と、肯定的な姿を伝えつつ、出来るようになったら、この子がどんなに自信を持って、色々な遊びに向かえるようになるかという話もする。

どのお母さんもわが子を可愛いと思っているし、自分の子どもが、前向きに伸びてくれたらどんなに良いだろうと思っている。だから、そのためには周囲の大人がどう援助できるかという視点でお話をする、お母さんもそれだったら家でもやってみようという気持ちになるのである。

三日前にやっとオムツが取れた子の場合、お母さんが、オムツでないとうんちが出来ないと泣くので可哀想だと思っ、これまでトイレでさせなかったのだ。でももし、幼稚園でうんちをしたくなった時に、どんなにこの子は辛いだろうかと想像を働かせるようにお話をするとお母さんもわかってくれたという。中嶋先生は、そのような具体例を挙げながら保護者に対する話の仕方を教えてくださった。

千葉先生は、お母さん自身も自分を認めて欲しいのだと言われた。子どもが出来ない事を自分のせいのように言われると、お母さんとしては傷つく。自分が頑張っている事を、先生や周りの人々に認めてもらいたいと思っているお母さんが多いのだ。

千葉先生の勤務される幼稚園では預かり保育を行っている。千代田区では3園が預かり保育を行っていて、それプラス、「子ども園」という形で長時間保育の園もある。それは、働くお母さんの支援であったり、子育てに行き詰まってしまったお母さんの気持ちを安定させるためのシステムであったりする。子育てに行き詰まったままにしておくと、ストレスから子どもに手をあげてしまいかねない。そんな時に少しでも長い間幼稚園で預かってもらえる気持ちがお母さんもあるのだ。預かり保育の先生は外部からの講師なので、担任にも言えない本音を出せることもある。

先日あるお母さんが、子どもを歯医者連れて行ったら、「ここまで虫歯がひどくなったのは親の責任だ」と言われ、

お母さんは傷ついてしまった。そして、幼稚園の預かり保育の先生に「こんなひどいことはないですよ、私の責任だなんて。」と怒鳴るようにいうのである。別に幼稚園に関係があるわけではないのだが、誰かに聞いてもらわないと気持ちが収まらないのである。そういう時は、「本当にそうよね」とお母さんの気持ちを受け止めてあげることが必要なのだ。

だから、子どもが何かをできるようになったら、子どもの成長プラス、「お母さんよく頑張ったね」とお母さんもほめてあげる。その一言を付け加えるだけで、お母さん自身もホッとして、子どもとの関わりも良くなるのだ。

【新任としての心構え】

(質問) 幼稚園で働く時に新任としての心構えとか、振る舞い方など、気をつけた方が良くと思うことがありましたら、教えて下さい。

3年目の馬場先生は、「とにかくやる気全開でいくこと」と言われた。幼稚園では、ベテランの先生方も本当に元気いっぱいなのである。それに負けないように、そしてそれ以上になるように、元気ハツラツでやろうと馬場先生は心掛けている。普段の健康管理も大事だ。働き始めると環境が変わり、なかなか身体がついていかなかったりもする。

冬になると小まめにうがいをしたり、インフルエンザの予防接種は受けに行ったり、そんな風にして、馬場先生は自分なりの健康対策をとりながら、頑張っているとお話しくださった。

【昭和で学んだ事が実際の仕事に生きていること】

(質問) 昭和で学んだことが仕事の現場でどのように生きていますか？

馬場先生は、ご自身の保育の基盤とも言える中心軸は昭和の授業の中で培われたと言われる。現場に出ると、授業で学んだ事がそのまま通じないという場面がどうしても出てくる。一人ひとりの子どもは全く違うし、限られた時間の中での戦いのようなところがある。その中で自分が思っていたことが出来ないという場面もあるという。

馬場先生は、学校で学んでいる時に、叱らない先生になろうと思っていた。しかし、どうしても叱らなければならない場面も出てくる。それは当然の事だった。学んできたことが一度壊れたかのようにも思えた。しかし、日々保育の実践の中で再び、授業で学んだことと体験とはどんどん結びついていくのだという。

現場に出てからも保育の理論や原理的なことをしっかり勉強することもできる。しかし、学生時代がとても大切だと馬場先生は言われる。現場に出てみて、もっとしっかり授業を聞いておけばよかったと思うこともある。後輩のみんなには毎日毎日を大切に、現場に出てきて欲しいと言われた。

野村先生は、学生時代に手遊びを覚えたり、ピアノが弾けるようになると就職した時に役に立つに違いないという手ごたえを感じていた。ところが、理論的なものに関しては、これを勉強して何に結びつくのだろうかという疑問もあったという。理論は難しかったり、理解しにくい部分もあった。しかし、今になって考えてみると根本の部分だし、今もう一度学生に戻って同じ授業を受けてみたら違う部分が見えてくるのではないかという。今、授業で聞いている話がどこに結びつくのかわからず、眠たくなることもあるかもしれないけれど、きっと将来、あの時あの先生が話していたことはこのことだったのかと思える場面があるので、授業を大切にしてほしいと言われた。

また、隣の部屋に展示してあった「手作りおもちゃ」を見て、「すばらしい」との感想をいただいた。勤めてしまうと、例えばこの話をエプロンシアターで見せてあげたいと思っても、他にやる事が色々あって、なかなかそういうものを作る時間がないのだ。だから学生の時に作った自分の教材は生涯の宝物になるし、これから活用できるのだとお話しくださった。

千葉先生は、学生時代に授業で教わった数々のおもちゃや教材を幼稚園で作っているという。勤めてしまうとなかなか教材研究もできない。千葉先生は、卒論や専攻科の修了研究で人形劇を研究した。卒論の時には、「どうぞのいす」という人形劇を友達と2人で作り、修了研究の時は、エプロンシアターをやった。その人形たちは今でも幼稚園で活躍している。集会などでみんなに見せたりすると、他の先生から、「あれ良かったからまた誕生会でやってくれない」とリクエストが出るくらいだ。既製の物もあるが、手作りの良さにはかなわない。今それを作れと言われたら、とても作る時間がないという。こういう手作りのおもちゃや教材を作れるのは学生のうちだとしみじみと言われた。手遊びなどもそうであるが、さまざまな教材を学生のうちにたくさん仕入れておいたらよいとアドバイスしていただいた。

【学生時代にやっておいた方が良くと思うこと】

(質問) 学生時代に学校での学びとは別に、自分でやったボランティア等で今に生きていること、またやっておいた方がよいというものがあったら教えてください。

中嶋先生からは、「とにかくピアノの練習に励んで下さい」とのアドバイスをいただいた。中嶋先生は、今ピアノでも苦勞しているという。

千葉先生からは、何か一つ、「これは誰にも負けない」というものを持っていたらよいと言われた。例えば、運動が得意だったら「鬼ごっこなら任せて」といった具合である。最近、幼稚園でもクラブ活動のようなものをやり始めているところがある。そこで、「私はお花を教える」とか「私は歌を教える」など自分が専門とするものが必要とされているのである。また、幼稚園によっては地域との交流でお茶をやったりお花をやったりしているところもある。このように保育に直接関係のないような教養が求められるのである。こういうものの追求は学生時代くらいしかできない。

千葉先生が学生時代にやっておけばよかったと思うのは、バレーボール。さらにテニス、卓球、バスケットボールなどだという。小学校と併設の幼稚園に勤務する千葉先生は、学校対抗の先生方のバレーボールの試合に小学校の先生方と一緒に参加しなければならず、かなり苦勞したという。

野村先生には、学生時代に一つやっておけば良かったという後悔がある。それは、保母の資格を取ることであった。学生時代の一年目の夏に保母の免許の試験を受けて何科目か受かったのだが、二年目は実習や採用試験の勉強で保母の免許にまでは手が回らなかった。勤め始めてから残りの科目を取ろうと思ったが、勉強する時間がなく、一度受かった科目も期限が切れてしまった。幼稚園に来る前の保育園のことももっと知っておけば良かったと言われる。

初等教育学科は小学校の免許も取れるので、後輩には後悔がないように学んでもらいたいという。野村先生は、小学校の先生に幼稚園のことを聞かれた時に、幼稚園ではこのようなことを大切に、このように実践していますという話は出来ても、それが小学校にどうつながっていくかがうまく説明できないという。また、小学校でやっていることが、十分に理解できない部分もある。

今から小学校教員や保育士の免許が取れない場合は、授業で関連科目を取るとか、小学校へ実習に行った友達の話聞いてみるとか、ボランティアで保育園に行ってみることを勧めてくださった。野村先生自身、そのようなことを学生時代にやっておけば良かったと今になって思われているという。

馬場先生も、もし保母免許がどこかで売っていれば、大金を出しても買いたいくらいだと言われた。馬場先生は、一ヶ月だけアルバイトで保育園に行った経験がある。1歳とか0歳の赤ちゃんのところに行ったのだが、本当に勉強になったという。

馬場先生はまた、学生時代にもっと遊んでおけば良かったと言われる。ボランティアでもいいし、趣味のことでもいい。旅行に行くとか、色々なことに興味を持って実践してみることがとても大切だと言われた。これらの知識や体験が全部自分の肥やしとなって、保育の場面において生きてくるのだ。

【他の先生方との連携について】

(質問) これから就職するに当たって、他の先生方と上手く接したり、上手く連携を取っていくコツみたいなものがあったら教えてください。

千葉先生は、自分で悩んでいることやどうしたら良いかわからないことがあったら、他の先生に言葉にして言うことだと言われた。千葉先生自身、決して自分一人で悩みこまないように、心掛けているという。

野村先生は、つい最近まで自分の失敗やクラスのことを職場の先輩に話すことが出来なかったという。「何でも言いなさい、困ったことがあったら一緒に考えるから」と言われても、どう話して良いのか分からなかった。

ところが、ある時に職場の先生に、「あなた一人で自分のクラスの子をどうこうするという気持ちを変えなさい」と言われた。そして「幼稚園の子どもを園長、主任、担任、学校や保護者と一緒になって育てているという気持ちを持った方が良いよ」とアドバイスを受けたのだ。そのことを転機として、野村先生の気持ちが軽くなり、保育が終わって職員室に戻ってきた時も、「こんなことがあって」という話をスッと出来るようになったというエピソードをお話してくださった。

もし、同じように一人で疑問や不安を抱えている人がいたら、「勇気を出して、こんなことがあって困ってるんです」

と言ってみたら良いと言われた。

【後輩へのメッセージ】

最後にシンポジストの先生方から一言ずつ学生へのメッセージをいただいた。

馬場先生は、保育をやっているにも上手くないことばかりで苦しい状態にいるという。でも苦しくてもやってこられたのは、子どもたちが「馬場先生が好き」と言ってくれるからだという。馬場先生は、子どもに「好き」と言われる先生でいたいと思って頑張っている。「現場に出ると楽しいことばかりではないのが現実。でも子どもたちの笑顔のために、頑張っ若い力で幼児教育の場を支えていってほしい。そのためにも今しっかり勉強して、現場に出ていくのを楽しみにしている」とのお言葉をいただいた。

野村先生は、幼稚園の現場は勤めてみると大変で、しかもあわただしいという。保育をして、掃除をして、会議もあって、バレーボールもやる。研究会や教材の準備をする時間もなかなか取れない。一年目二年目は、家に帰れば、寝ている時間と食事の時間以外はずっと指導案を書いていた。でもやめないで、十数年やってこられたのは、次の日に幼稚園に行くと子ども達に会えるという思いや、子ども達の成長を見ていられるという喜びだった。これが保育の仕事の魅力であり、野村先生を支えてきたものである。是非「大変だけど楽しいし、やり甲斐がある」という気持ちを味わってもらいたいと言われた。

千葉先生は、これから幼稚園の先生を目指す人も、小学校の先生を目指す人も、お母さんになる人も、どんな道に進んでも初教の勉強は、(たとえすぐにその成果が出なくても)無駄なことは一つもないと言われた。

また、「自分を好きである人」になってほしいと言われた。自分の良さを自分自身で見つけて、きちんとアピールできる人。自分が好きであることが、他人を見ること、人とよくかかわることの基本なのである。たくさん勉強して、たくさん遊んで、自分を磨いて良い先生を目指してほしいと言われた。

中嶋先生は、最初は商事会社にお勤めだった。現役の時公立の幼稚園を受けたが落ちてしまったという。そして5年かかって夢を叶えた。だからもし、現役の時に受からなかったとしても絶対に夢を諦めないでほしい。中嶋先生の座右の銘は「継続は力なり」だという。どんな事でも良いから、諦めずに毎日毎日続けていると、絶対実を結ぶのだと確信を込めて言われた。

(幼稚園シンポジウム記録作成：神谷珠実，井口弥季子，横山文樹，松本淳)